

知られざる
三重にまつわる
文学・美術を
紹介します。



上段左より「絶句類選」、「夜航詩話」、「夜航余話」
下段左より「古詩大観」、「譯準笑話」（「夜航詩話」のみ筆者蔵、他は三重大学附属図書館蔵）

CHRONICLE OF MIE
VOL. 10

【文学編】

吉丸雄哉 よしまるかつや
人文学部・文化学科准教授
専門は日本近世文学

晩成の人、津坂東陽。

艱難辛苦の前半生を経て、後半生に花咲かせる。藩校有造館設立を建議し、初代督学として教育に尽力。詩学書にも傑出した才を発揮した。

『ウェブ三重大45号』の齋藤拙堂に引き続き、今号も有造館の督学(校長のこと)津坂東陽を紹介しよう。また儒者かと思うかもしれないが、津坂東陽は齋藤拙堂とは対照的な人生を送り、興味深い。拙堂は幕府の学問所である昌平黉に学んだエリートである。つとにその才を高く評価され、24歳で有造館講師となり、以後全国に名を轟かせた。甲子園や大学野球で活躍した選手がドラフト上位で指名されて、そのまま主軸として順調に活躍した感がある。それに比べ、津坂東陽は艱難辛苦、紆余曲折の前半生を送り、成功までの道のりが長かった。独立リーグや育成選手を経て、ようやく花開いた選手とでもいえようか。

東陽の父房勝はもともと医者で、のちに三重郡平尾村(現四日市市平尾町)の庄屋職を継いだ。東陽も15歳から名古屋で医を学ぶが、3年で医の道は諦め、儒の道へ進むことを決意する。23歳で京に出て、ほぼ独学で学問を続けた。大火で著作・蔵書を失ったこともあり、32歳で京を離れた。津藩の奉行の家庭教師を経て、儒官となったのが33歳で、そのときわずか十五人扶持(年収270万円程)。伊賀に赴き教授にあたるが、地元は学問廃退、人士の気質は放蕩無頼に墮していたため、十代藩主藤堂高兎により50歳で津に召還されるまで、現地でさまざまな困難と格闘せねばならなかった。津へ召還され、侍読(主君側付きの学者)となり、その後藩校の設立を高兎に進

言したのが59歳。藩校有造館の設立成り、初代督学となったのが63歳である。俸禄では66歳で四百石(年収1400万円程)を得るまでになった。成功した後半生ではあるが、石川之駈が32歳で二代督学に、拙堂が48歳で三代督学になったことに比べ、遅咲きの人生である。東陽がその才にかかわらずなかなか活躍の場を得られなかったのは、東陽自身の性格も影響している。東陽は直情直言の人で、味方より敵を多くつくる傾向があった。讒言など



津坂東陽 つさかとうよう
儒学者
1757年～1825年
宝暦七年(1757)生、文政八年(1825)没。名は学幹。字は君裕。苦学の前半生を経て、藩校有造館初代督学までのほりつめた立志伝中の人。

生涯に政敵の妨害も数多く受けた。英明な高兎がその才を愛さなければ、後半生の活躍はなかっただろう。東陽の文事は量が多く、多岐にわたる。分類しつつ、代表的なものをあげると、藤

堂高虎伝『津脩録』、郷土史書『勢陽考古録』といった歴史書類、あるいは藩校教科書となった『孝経發揮』、裁判案文集『聴訟彙案』、女子教育書の『道之柴折歌合』といった教育書類の残数が多く目につく。文学で評価が高いのは詩学書である。杜甫の律詩の注釈の『杜律詳解』、詩の評論の『夜航詩話』・『夜航余話』は優れた内容である。選詩集『絶句類纂』・『古詩大観』は広く人々に愛された。詩集は公刊されることなくすべて写本で伝わり、その代表である国立国会図書館蔵の『東陽先生詩文集』は漢文10巻、漢詩10巻、計14冊と大部である。変わったところでは漢文習熟手引書の面のある『訳準笑話』という漢文笑話を著している。詩集にはその前半生の憂悶が反映した部分もあり、興味深い。詩の評論は公正穏当なものから自由闊達なものまで幅広く飽きさせない。東陽子孫の津坂治男氏が東陽の伝記二篇、『津坂東陽伝』(桜楓社、1988)と『生誕250年 津坂東陽の生涯』(竹林館、2007)を著している。『夜航余話』が、岩波新日本古典文学大系65『日本詩史 五山堂詩話』に、掛斐高氏による注釈を付して収録されており、東陽の文事の白眉である詩学書を知るにはそれを読むといいだろう。東陽の功績の最大は有造館の建議である。東陽は督学就任の3年後に病に倒れるが、有造館は以後優れた人材を輩出する。財政難の中、藩の命運を教育に賭した津藩の決断は成功だったといえよう。



【左】津市宗徳院の津坂東陽墓碑
【中】津市お城公園に移築された有造館正門の入徳門
【右】藩校有造館跡の石碑(津市NTT津丸の内ビル)

【誌面中央】津坂東陽編『絶句類選』(三重大学附属図書館蔵)見返し